第2部

VOICES

戦争体験の記録

INTERVIEW インタビュー
MEMORIES 手記

第2部 VOICES 戦争体験の記録

INTERVIEW インタビュー
MEMORIES 手記

平成27（2015）年8月15日に、日本は戦後70年を迎えました。
戦争当時の様子とはどのようなもので、人々は何を思っていたのでしょう。
70年以上が経った今、現代を生きる私たちには戦争というものがなかなか想像できません。
そこで今回、かつて戦争を経験した、当時のことをよく知る12人の体験者にお話を伺いました。
インタビュアーは、「平成27年度港区平和青年団」の高校生7人と、
「港区平和都市宣言30周年記念イベント実行委員」の大学生9人の、計16人の学生たち。
過酷な環境を生き抜いた方々のお話を聞いて、現代の学生たちに戦争はどう映るのでしょうか。
また、「手記」として投稿いただいた26人の方々の体験談にも、貴重なエピソードが詰まっています。

CATEGORY

1 軍人・軍属 …… 56
2 外地 …… 68
3 銃後 …… 80
4 空襲 …… 118
5 疎開 …… 150
6 原爆 …… 174
7 戦後 …… 186
インタビューを終えて …… 190

戦争体験者の方々

浜野豊吉さん

山田寿則さん

小柴恭男さん

佐々木光子さん

岩垂広子さん

上松洋子さん

沢田久次さん

松宮秀好さん

飯塚義一さん

篠倉正信さん

八木達也さん

石川達二さん

高校生……「港区平和青年団」

秋山裕香さん

荒木裕二さん

佐藤 宝さん

千保木 蘭さん

保科彰斗さん

山﨑朱莉さん

藁谷 結さん

大学生……「港区平和都市宣言30周年記念イベント実行委員」

足立真優子さん

池上沙衣さん

任 俊赫さん

佐々木 嶺さん

白塚美歌さん

須藤康夫さん

髙橋麻里奈さん

中村充孝さん

堀内史誉さん

INTERVIEW ● 浜野豊吉さん

あの頃は、死ぬとか負けるとか考えたことはないですよね。しゃにむにやりました。

山﨑朱莉（やまざき・あかり）
郁文館グローバル高等学校3年生
18歳

藁谷 結（わらがい・ゆい）
愛国高等学校3年生
18歳

中村充孝（なかむら・みつたか）
明治学院大学4年生
22歳

インタビュアー

軍属・・・正規軍人ではないが、軍人に準じて戦争遂行のためのさまざまな任務にあたった人の総称。

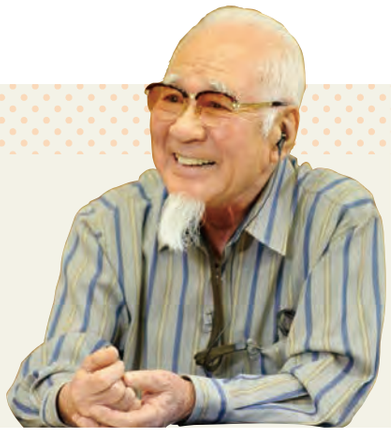
少年の頃、飛行機乗りに憧れていた浜野豊吉さん。商業学校を3年で中退後は東京陸軍少年飛行兵学校へ進み、飛行訓練に励んでいました。終戦を朝鮮半島の春川で迎え、引き揚げ船での復員も経験されています。今回は主に訓練生時代の生活についてお聞きしました。また、聞き手の高校生・大学生と同じ年頃の若者たちがどのような思いで軍隊に入ったのか、当時のお気持ちなども語っていただきました。

飛行機乗りと軍人に憧れて少年飛行兵学校へ行くことを決めました

山﨑 ―― 子どもの頃は飛行機乗りに憧れていたということですが、何かきっかけがあったのですか？

浜野 ―― 小学校5年生ぐらいの時に、飛行機乗りに憧れて、『航空少年』という雑誌を毎月とっていたんです。それと軍人に憧れていてねえ、階級章を見れば軍人の位がわかるので、なるなら将校にならないと、と思っていました。私の家はカツオ節を扱う仲買をやっていたのですが、当時うちで働いていた小僧さん（奉公人）が入営したので、帰ってきた時に軍隊の話を聞いたりしてね。上官からビンタをされた話とか。今の人はビンタってわからないでしょ？

山﨑 ―― 叩くことですか？



戦争体験者 **浜野豊吉**（はまの・とよきち）さん （88歳）

昭和3（1928）年、日本橋区（現・中央区）生まれ。昭和18（1943）年に東京陸軍少年飛行兵学校入校。昭和19（1944）年に宇都宮陸軍飛行学校に入校し、同年9月に下館の分教場へ。翌年2月から朝鮮半島で飛行訓練を行い、春川で終戦を迎える。戦後は築地で仲卸業を営んでいた。現在は港区に居住。

※マンガは、現代の若者が戦争・戦災を追体験するというコンセプトで描かれています。

VOICES
戦争体験の記録

浜野 ――そう、平手で殴るんですよ。往復ビンタっていうのは右頬左頬を往復して殴られるんです。これが1回や2回じゃないんですよ。私も後に何回やられたことか……。口の中が切れて血だらけになるしね。そういう厳しいところだからこそ、軍隊に入ったら絶対将校にならないといけないと思いました。でも、陸軍幼年学校に入るには歳をとりすぎ、士官学校には若すぎたので、少年飛行兵学校に入ることにしたんです。

私が入った16期生は、750人ぐらいの若者がいて、1年間学んでいました。午前中は学科を文官と呼ばれる軍人ではない先生から4時間学んで、午後は術科といって一般の軍事訓練や練習機の構造などを学びました。入学後10カ月ぐらい経って、今度はグライダーの基礎訓練をやりました。術科は希望していたので面白かったのですが、学科に関しては、入る前に商業学校に3年間通ったので、国語や数学を学ぶのが馬鹿らしくなってしまって（笑）。とはいっても、学科の中で気象学は今でも役に立っています。ラジオで気象予報を聞きながら天気図を自分で書くことができますしね。風向きを見るとちょっと先の天気はわかります。

一同 ――**すごいですね！**

浜野 ――それから、幼い頃から習っていた剣道とそろばんは、少年飛行兵学校へ行ってからもすごく役に立ちました。1週間に3回ぐらい、術科で剣道をやるんですね。今まで剣道を全然やっ

コラム 1 ● 戦時中の雑誌

戦時中には戦意高揚を促す軍事雑誌が数多く出版されたが、その中には『航空少年』や『飛行少年』、『海洋少年』などの少年向けの軍事雑誌も販売されていた。特に人気があったのは昭和17（1942）年に発刊された『航空少年』。少年航空兵の養成を目的に創刊された雑誌だが、発刊当初は最新の航空技術や模型飛行機の作り方などが紹介され、戦争とは関係のない飛行機の情報も掲載されていた。しかし、戦況の激化にともない、特攻隊の手記や日本軍の戦闘機の紹介、軍歌の暗唱を呼び掛ける記事などが増え、子どもたちの戦意高揚を促す内容が中心に。これらの軍事雑誌は終戦とともにすべて姿を消した。

『航空少年』（発行：誠文堂新光社）の昭和18（1943）年12月号（左）、昭和19（1944）年3月号（右）の表紙（国立国会図書館蔵）

訓練で使用していたグライダー

少年飛行兵学校での訓練の様子

たことがない人が全体の3分の2ぐらいか、もっといたのかな。だから私にとっては相手にならないんですよ（笑）。あと、所属する中隊に事務室があるんですが、年に2回ほど事務の検査があるんです。そこで帳面をつけるためにそろばんの得意な私が呼ばれて、消灯してから2時間ぐらい手伝っていました。そのおかげで便所掃除なんかは免除してもらえましたね。軍隊生活は、殴られることも何十回とあったけれど、そういう意味では結構良い思い出もありますよ。

少年飛行兵学校で一番つらかったことは30キロメートルほど歩いた真冬の行軍です

中村 ―― 軍隊の中で良いこともあったと思うのですが、記憶に残っている中で一番つらかったり、嫌だったりしたことはなんですか？

浜野 ―― あれは少年飛行兵学校に3月に入って、確か翌年の1月だったと思います。消灯ラッパが鳴ると電気が消えるんですが、夜中の12時頃に突然、非常呼集のラッパが鳴ったんです。「完全軍装して集合」と、大きい声で言われましてね。何をやるのかと思ったら、行軍（軍隊が隊列を組んで移動すること）だったんです。全部で30キロメートル弱は歩いたのかな。あの時はつらかったけれど、同時にやればできるんだなとも思いました。行軍の一番後ろにはトラックが1台付いてきて落伍者（ついてこられなくなる人）を拾っていくんですが、そんなのに乗って帰ったら、あとで大変なことになってしまうから、みんな我慢して歩くわけです。落伍者は15人ぐらいいたと思いますけど、卒業もできなくて家に帰されてしまいましたよ。間違ってもそういうところで落伍すると、次の段階に進めません。

1年経って、今まで勉強したことを総合したうえで進路希望を出すことになっていて、その先は「操縦」「航空通信」「整備」の3つに分かれています。一番多いのが整備。次に通信が多くて、操縦にまわるのは700人のうちで200人ぐらいなんです。私は操縦にまわって、宇都宮の陸軍飛行学校に行き、学科とグライダーを学びました。グライダーは初級、中級、上級と3段階あって、初級というのは「ゴム索」（ゴム索曳航）です。ゴムの綱でグライダーを20人ぐらいの人が引っ張って飛ばすんです。中級では、ゴム索でも最初は引っ張りますが、最後は「赤とんぼ」が引っ張ってくれます。赤とんぼというのは、オレンジ色の練習機の愛称です。そこではグライダーに100回以上は乗りましたけれど、そういう練習を行っているうちに、優劣を判断されて、ふるい落とされるんです。3分の1くらいは落とされたかな。それで、次の進路として選んだのが、下館飛行部隊でした。そこでは飛行機に乗り

下館分教場での訓練の様子

ました。

終戦間際も毎日訓練の日々 私たちは大事にされていたと思います

中村 ―― 戦争末期の昭和20（1945）年になって、日本から離れて朝鮮半島に移られたそうですが、その時の経緯や社会の状況について教えてください。

浜野 ―― 1945年の2月はまだ下館にいたんですよ。そこで訓練をやっている時に3回ぐらい、米軍機のボートシコルスキーとグラマン・ヘルキャットの機銃掃射を受けました。飛行場に当時一番新しい戦闘機が並んでいたんですが、それを狙って機銃掃射してきたんです。30メートルぐらい降下してくるから、相手の顔がはっきりわかるんです。最初やられた時なんかびっくり仰天ですよ！　非国民みたいで怒られるかもしれないけれど、あの時は20人ぐらいが頭を抱えて逃げて、自分の兵舎に戻って毛布の下に潜ってしまった。最初は怖かった。それが事実なんです。だから機関銃を撃って反撃するどころの騒ぎじゃなかったです。そんなことが2月にあって、その後も飛行場から東京の方を見ていると、地平線の上が夜なのに昼間みたいに赤く染まっていました。爆撃でやられていたんでしょう。

それで、本土ではもう訓練はできないということになり、朝鮮半島に行くことになりまして、下関から5千トンぐらいの貨物船で、今の韓国の釜山まで行きました。その後、釜山から汽車で2時間ぐらいのところにある蔚山に滞在しました。我々は教育隊なので練習するだけでしたが、ここの飛行場には実戦部隊もいましたから、アメリカの飛行艇からの爆撃はありました。

中村 ―― その当時、日本がこのままだと負けるのではないかと考えたことはありましたか？

浜野 ―― ないですね。ただ、少年飛行兵の先輩の将校から日本が負けるかもしれないという話を聞いてはいました。蔚山に行った最初の2～3カ月ぐらいは物資が豊富で、飛行機の材料にしても、天皇陛下からもらった物だから大事にしろと言われていましたが、だんだんと物が少なくなってきて、さらには爆撃も激しくなってきたこともあり、「ここでは危ない、さらに北へ行け」ということで、今の38度線の辺りにある春川に行って飛行訓練をしました。その頃には単独で赤とんぼに乗って毎日飛行訓練をしていましたね。

中村 ―― 朝鮮半島に渡ってから終戦までの間で、怖かったことはありますか？

浜野 ―― 怖かったことはなかったです。爆撃も数回しか受けていないし、とにかく訓練ばかりしていたので。だから私たちは大事にされていたんだと思います。どういうわけで大事にされたかは知らないけれども……。私と飛行兵学校の同期でも、通信にいった人た

コラム2 ● 特攻（とっこう）

特攻とは、特別に編成して攻撃することを意味するが、特に太平洋戦争末期に行われた、日本陸海軍による体当たりの自爆攻撃を指す。よく耳にする特攻隊は、太平洋戦争末期に特別編成された「特別攻撃隊」の略称。特攻には主に、爆装して敵艦に体当たりした航空特攻と、特殊潜航艇や人間魚雷などの水中特攻、爆装したモーターボートによる海上特攻などがあり、昭和19（1944）年10月にフィリピン・レイテ沖海戦で「神風特別攻撃隊」として海軍が出撃させたのが最初だった。この攻撃法は終戦まで続き、特攻機には10代や20代の若者が多く搭乗していた。特攻による戦死者は約4,000人にものぼるといわれている。

昭和20（1945）年5月、エンジントラブルで鹿児島県沖合に不時着した零戦52型機（提供：知覧特攻平和会館）

ちはほとんどやられていますよ。同じ操縦でも、私の半年先輩、昭和17（1942）年の9月に入隊した人たちは、かなり多くが亡くなったと聞いています。

15年くらい前に、家内と九州旅行に行った時に、鹿児島県の知覧町（現・南九州市）に行きました。「知覧特攻平和会館」に行った時は、もう……（言葉に詰まる）。特攻で亡くなった兵士の写真が壁一杯に貼ってあってね、名前と何期というのが書いてあって……もうたまらなかったですね。死ぬまでにもう1回お参りに行こうと思っています。本当に自分もあと半年早く入隊していたらと思うと……。あの時分は、死ぬとか負けるとか考えたことはないんですよ。しゃにむにやりました。だから飛行訓練時に考えていたのは、実戦の飛行機に乗ったらどういう風に敵機を撃ち落とそうとか、そういうことだけでした。一般の国民だって、負けると思っていた人は少ないんじゃないかと私は思いますよ。何万人に1人ぐらいはいたかもしれないけど、やっぱり大部分の人は日本が負けるとは思わなかったですよね。だから戦争はもうやっちゃいけないです。戦争は無駄だよ、無意味。

葉谷 ―― 終戦の玉音放送はどこで聞かれたんですか？

浜野 ―― 春川で、航空無線を通じて聞きました。私たちは航空部隊なので、高性能の無線機を持っていたんですよ。それでここにいたら危ないというんで、終戦の放送を聞いてから3日後には、持っている被服や食料、35ミリの機関砲などを列車に積んで、春川から南下しました。釜山を目指していましたが、途中でこれ以上は無理だということで、鳥致院という町で降りて、そこに2カ月ぐらいいました。ここでは何もやることがなかったですね。訓練や学科があるわけではないので、寝て起きてぶらぶらするか、どこかに散歩にいくか……。特攻隊で亡くなった人たちのことを考えると、私たちがやっていたことはまったく正反対なんです。だから知覧町へ行った時は本当に申し訳ないと思いました。

ようやく引き揚げ船に乗れるというので、鳥致院から釜山に行きました。そこにはアメリカ軍がいましてね、DDT（殺虫剤。終戦直後、米軍がシラミなどの対策のために日本へ持ち込んだ）の粉をかけられて、時計とか良い物は米兵にみんな取られました。

コラム 3 ● 玉音放送（ぎょくおんほうそう）

玉音放送とは、昭和天皇が自ら全国民にポツダム宣言受諾を伝えたラジオ放送のこと。昭和20（1945）年8月15日の正午に放送された。この放送は法的な効力をもつものではなかったが、太平洋戦争における日本の降伏を直接国民に伝えたという意味では強い影響力をもっていたといえる。また、ほとんどの日本国民は、この玉音放送によって初めて天皇の肉声を聞くことにもなった。8月15日は平日だったこともあり、自宅よりも職場や工場、学校などで聞いた人が多く、朝鮮、台湾、満州といった外地の戦場でも海外放送を通して流された。言葉づかいが文語体で難解だったことや、雑音が多かったことから敗戦の事実を理解できない国民も少なくなかったといわれる。

昭和20年8月15日正午すぎ、終戦を告げる玉音放送を聞いて涙する人々（提供:共同通信社）

春川で飛行訓練を行っていた頃の浜野さん（当時17歳）

浜野さんからのメッセージ

戦争というのは絶対に避けるべきです。とにかく勝てる戦争であろうが、負ける戦争であろうが、戦争をやっては駄目です。日本は良い国ですよ。安心して学校に行かれるし、商売もできるし。だからそういう国をずっと維持していくのは、当面はあなたたちの役目ですよ。あなたたちが25～30歳になって、この国を背負っていくのはすぐです。本当にあっという間なのでしっかりやってください。それだけは本当に今の若い人にお願いしたいですね。

南方にて

北山文司さん（92歳）

私は昭和18年6月20日、歩兵第百十五連隊（高崎）に召集され、11月19日独立混成第一連隊に転属、5日後に本土防衛のため小笠原諸島に配属命令が出ましたが、突然中止になり、最新の九九式兵器を返納するかわりに古式の三八式歩兵銃を支給されました。

南方方面状況緊迫のために、12月22日呉港を巡洋艦「妙高」にて出航し、トラック港に立ち寄り、昭和19年1月2日ニューアイルランド島カビエン港に上陸し、2週間後200キロメートル先のキマダンに到着しまして、その後終戦まで駐留しました。

昭和19年1月中にキマダンに到着してからは、毎日午前8時前後と午後3時前後にはグラマンとシコルスキーが2機編隊で偵察の毎日で、これはというところを射ちながら帰っていきました。

一度機関銃で射ちましたら、翌日多くの戦闘機の反撃にあい、毒ガスかと思われる意味不明の煙さわぎがありました。そのため、それ以後は一切何もしませんでした。キマダン到着後、今度はまたアドミラルティ諸島転進の命令が出ましたが、カビエン港までは200キロメートルもあり、トラック輸送にも日時がかかり、待機輸送船では時間的に無理なので部隊長が命令を拒否しましたので、替わりにカビエン港を警備する部隊が転進しましたが、3月になると海空の攻撃が激しくなり、3月いっぱいで何の援護もなく玉砕をしてしまいました。

また、スパイが上陸したとの情報が入りましたので、4月1日より東海岸より西海岸まで探しましたが何もありませんでした。途中シルムというところで8機の銃撃を受け戦死1名重傷1名軽傷1名が出てしまいました。

後日、2回大きな艦砲射撃がありましたが、大事に至らず出撃途中で帰隊しました。隊の日常はマラリアになっても薬も無くなりただ寝ているだけでした。食事も椰子のコプラとサツマイモ二切れと草の葉の塩汁だけの毎日でしたので、栄養失調気味で体力も半減の状態でした。

終戦後の昭和20年11月2日キマダンを出発。11月9日ニューブリテン島ココボに上陸、昭和21年3月15日ココボを出帆、3月23日浦賀に上陸し、3月25日召集解除になり、2年9カ月ぶり無事帰宅しました。

平和に感謝

西村米子さん（88歳）

私は昭和2年5月に芝三田南寺町（現：三田四丁目）で誕生し、昭和26年に結婚するまで同じところで成長しました。

昭和15年3月御田尋常小学校を卒業、女学校2年の昭和16年12月に大東亜戦争となりました。翌17年より英語の授業はなくなり、3学期からは勤労動員が始まりました。5年生の時はずっと工場勤務で、工場では後に日本バレーボールを金メダルに導いた松平康隆監督も中学3年で動員仲間でした。

昭和20年3月10日の空襲に驚いた家族が、知人の紹介で群馬県に疎開した時も、学生の私は工場勤務のために東京に残りました。

昭和20年3月、記念写真もない証書だけの卒業となりました。

卒業後、軍属として六本木の東京連隊区司令部防衛召集係に陸軍筆生としての勤務が始まり、1カ月半後、点呼係に移りました。

当時すでにバスや都電は走っておらず、家から魚籃坂下、四ノ橋、天現寺、広尾、日赤病院下、霞町を経て青山墓地下まで歩いて職場に行き、帰りは同僚と六本木、麻布をまわって三田に戻ったりしました。

点呼召集された中に有名な歌手がいて道案内をした縁で、水の江滝子の「劇団たんぽぽ」の築地公演に招待された思い出もあります。

母や姉妹が疎開した後に大きな空襲が二度ありました。一度は御田小学校も近くの寺も焼けました。火柱が上ってまるで噴水のように見えました。三田通りも慶應義塾大学も焼けた時だと思います。家の2階の屋根に火の粉や木片が真っ赤になって落ちてきました。翌朝見たら消炭で一杯でしたが屋根瓦は何ともありませんでした。

昼間の空襲の時は、家のまわりが全部煙にまかれました。私は苦しくて風呂桶の水で手ぬぐいを何度も何度もぬらし、顔に巻きましたがすぐ乾いてしまいます。三田松坂町（現：三田四・五丁目、高輪一丁目）に住んでいた警防団長の叔父が防毒マスクをつけて、大丈夫かと飛んで来てくれました。おかげさまでその時も家は焼けずに助かりました。

食料事情はだんだん悪くなり、司令部の給食もおかずなしのコーリャン（イネ科の一年草。モロコシの中国での呼称）だけでした。食事は麻布中の校舎で作られていましたので、兵隊さんの引くリヤカーの後押しをして食事を運びました。綿の入った防空頭巾をかぶり長袖長ズボンで真夏の中を歩くのは大変でした。

そのコーリャン飯で思い出しますのは、青山墓地下に空襲で焼けだされた母と子が、トタン屋根の下で雨露をしのぐ生活をしていたことです。ある時、私と食事の盛り付けをしていた兵隊さんが、みんなのコーリャンを少しずつ減らし、自分のは半分にしてよいから、それでおにぎりを作れと言われました。兵隊さんはそのおにぎりを誰にも見つからないように駆け足で墓地下の親子に届けに行きました。このことはその親切な兵隊さんと私の秘密です。

そんな折、司令部が奥多摩に疎開することになり、私も母たちのところに行くことに決め、終戦半月前の7月31日付で司令部をやめました。

大変恐ろしく、忘れ難い数々の体験をし、二度とあのような思いを誰もしなくてよい、平和な生活が続くように祈り願う今日があります。

日本の航空機（出典：『写真週報』299号、提供：アジア歴史資料センター、国立公文書館蔵）

INTERVIEW ● 山田寿則さん

朝鮮半島にて父が手配した闇舟で、家族6人決死の脱出。私たちはつくづく人に恵まれました。

髙橋麻里奈（たかはし・まりな）
東京学芸大学2年生
20歳

任 俊赫（いん・しゅんかく）
慶應義塾大学2年生
21歳

荒木裕二（あらき・ゆうじ）
正則高等学校2年生
17歳

インタビュアー

外地・・・終戦までの、本土以外の日本の領土を指す。朝鮮半島や台湾など。

旧制中学1年時に朝鮮半島北部の興南で終戦を迎え、劣悪な環境下での共同生活の末、海を渡って日本への引き揚げを果たした山田寿則さん。穏やかな暮らしから一転、ソ連の囚人兵におびえて過ごした日々や、闇舟に乗っての脱出劇を語っていただきました。死と隣り合わせの生活を送るなかで山田さんが垣間見た人間の情に、学生たちも胸を詰まらせました。

日本統治下の朝鮮半島・興南に生まれ、子ども時代は戦時下とは思えぬほど恵まれた環境で生活

任 ―― 山田さんが生まれた朝鮮半島の興南とはどういうところだったのですか？

山田 ―― もとは日本海に面した小さな漁港でした。日本統治時代の昭和5（1930）年ごろから工業地帯として開発が始まり、東洋一の化学工場を抱える町に発展しました。当初は肥料の製造が主でしたが、最終的には火薬の製造や金属精錬なども行っていたそうです。記録によりますと、2万人の日本人と4万人の朝鮮人が働いていました。

私の父は、工業地帯開発の中心となった日窒（日本窒素肥料株式会社：現在のチッソ株式会社）の社員で、終戦時は工場全体を総括するような総務の仕事に就いておりました。

任 ―― 気候的にはどうでしたか？

山田 ―― 夏は30度近くまで上がりますが、冬は零下20度まで気温が下がります。雪は1メートルくらい積もりますし、大きな川も全面凍結しました。

戦争体験者 山田寿則（やまだ・かずのり）さん （83歳）

昭和8（1933）年、朝鮮半島咸鏡南道興南生まれ。日本窒素肥料株式会社（日窒）の社宅で暮らしていた、旧制中学1年時に終戦を迎え、翌年4月、一家6人で闇舟に乗船し興南を脱出。38度線を越え注文津、釜山を経由し、日本への引き揚げを果たす。昭和43（1968）年、旭化成株式会社に入社。定年まで勤めた。現在は港区に居住。

※マンガは、現代の若者が戦争・戦災を追体験するというコンセプトで描かれています。

任――社宅ではどのような暮らしをされていたのですか?

山田――私の住んでいた社宅は、すべて赤煉瓦造りで電気が使い放題でした。暖房設備もありましたし、温水も供給されていました。くみ取り式が当たり前だった時代ですが、社宅のトイレは水洗式です。戦時中といいながらも恵まれた環境にありましたね。

その社宅に昭和20(1945)年まで、両親と私、弟2人と妹1人、合わせて6人で暮らしていました。父は工場建設当初からおりましたから、20年近く住んでいたようです。

任――山田さんが小学生のときに開戦したのですか。

山田――昭和16(1941)年12月8日の音楽の時間に、校内放送で戦争の勃発を知りました。当時は小学校ではなく国民学校と呼ばれていまして、子どもたちもスパルタ式の戦時教育を受けるんですよ。男子は剣道、女子はなぎなたを学び、3時間の授業を終えたあとは校庭で軍隊式の行進をします。戦意高揚を目指していたんでしょうね。

任――昭和20年、中学入試の日にB17がやってきたと聞きました。

山田――旧制中学は義務教育ではないので試験があるんですが、入試を受けに試験場へ行っているときの出来事でした。3月とはいえまだ真冬で、外は雪景色です。真っ青に澄み切った空を鮮やかな飛行機雲を引いてB17が飛んできたので、中学校の防空壕へ逃げ込みました。そうは言っても、偵察くらいで、本土のように爆撃や焼夷弾攻撃を受けることはありませんでした。

少し話がそれますが、入学試験の口頭試問で、「特攻隊に志願するか」と

コラム 4 ● 日本の朝鮮統治

大日本帝国は明治43(1910)年8月29日に、大韓帝国を併合、朝鮮半島を統治下においた。太平洋戦争終結後の昭和20(1945)年9月9日まで、朝鮮総督府による統治が続いた。昭和6(1931)年の満州事変以降、日本語標準語の常用、日の丸の掲揚、君が代斉唱、神社への参拝などを義務付けた「皇民化教育」や、「氏」を創設し名を改める政策「創氏改名」といった、日本化政策が行われた。

落成式後の朝鮮総督府新庁舎(出典:『朝鮮138』、国立国会図書館蔵)

聞かれました。あとになって知ったことですが、「志願しない」と答えた受験生は落とされたそうです。当時は弱虫扱いを受けていたようですが、今になってみれば、そう答える方が正直だったなと思いますね。

任――**山田さんは志願されたのですか？**

山田――もちろんです。特攻隊に志願しますと言いました。

任――**そういう状況だから、ですか？**

山田――言わざるをえなかったというより、言わざるをえなかった。そういう雰囲気だったんですね。

任――**山田さんのお父さんは、徴兵されなかったのですか？**

山田――当時は教育召集という制度がありました。補充兵の教育のために行う召集ですね。3カ月間軍隊にとられます。1945年の8月15日、父はちょうど教育召集で家を空けていました。近くの軍隊だったのが幸いしましたね。実は、あの日、父がすぐに家へ戻れたからこそ、今の私がいるんじゃないかと思うのです。場合によっては、その後の生活状況から朝鮮（残留）孤児になっていたかもしれない。今もときどきそう考えることがありますね。

海上から見た興南港

興南港と、興南工場

日本人が一人また一人と亡くなる中 父が手配してきた闇舟で朝鮮半島を脱出

山田――実は、興南にいた私たちは、広島や長崎に原爆が投下されたことを知りませんでした。

任――**当時の情報源はラジオですよね。**

山田――得られる情報はいわゆる大本営発表の戦果のみ。「我々の損害は軽微である」といった情報しか入りません。

髙橋――**疑う人はいなかったのですか？**

山田――戦争に負けるなんて、誰も思っていなかったのでしょう。それだけ統制がとれていたということですね。

髙橋――**玉音放送を聞いたときは、さぞビックリされたでしょう。**

山田――動員先の軍需工場から学校へ呼び戻されたんですが、玉音放送は雑音がひどくてよく分からなかったんです。友人たちと、勝ったのか、負けたのかと議論しながら下校しました。8月15日はよく晴れた日で、高空を飛ぶ戦闘機が見えたんです。私はそれを見上げて、先ほどの放送はソ連に対する日本の宣戦布告なんじゃないか、そんなことを考えていました。しかし実際は、降伏宣言です。その晩から、朝鮮人と日本人の立場が逆転しました。

髙橋――**社宅を出なければならなくなったのですか？**

山田――強制退去です。24時間以内に手に持てるだけの物を持って、日本人街の社宅から朝鮮の人たちが住んでいた山間の十軒長屋へ移りました。生活は一変しましたね。食べ物がない上、仕事も収入もありません。お風呂にも入れず着たきりスズメですから、シラミがわくんですよ。栄養失調や発疹チフスがもとで次から次へと亡くなりました。

荒木――**山田さんご自身は大丈夫だったのですか？**

山田――終戦後間もなくソ連軍が朝鮮半島北部へ侵攻してきたことはご存じでしょうか。当時私は、ソ連軍が営む日本人向けの病院と日本人街の間の連絡ボーイを務めていました。ソ連兵の主食は黒パンでしたが、それにバターをつけて患者に食べさせるんです。その仕事の恩恵を受けてか、私自身はさほど食料に困らなかったんですね。

高橋 ―― **朝鮮の方との関係で、つらいことはありませんでしたか？**

山田 ―― 日本が戦争に負けたことで地位が逆転しましたから、朝鮮の人の中には日本人に対する憎悪といった感情もあったと思います。ですが中には「お米ありますか？」と言って食料を運んでくれた人もいたんですよ。父がかわいがっていた朝鮮人の青年です。終戦後、彼は保安隊（当時の北朝鮮地区の警察）に入っていたんですね。夜間にお米を運んでくれては、「困っていませんか？」と声をかけてくれて……。子どもながらに人間の温かみを実感しました。

荒木 ―― **寒さや病気以外にも、命の危険を感じたことは？**

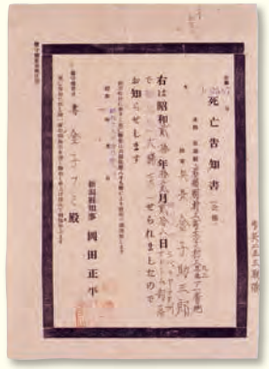
山田 ―― 興南にいたソ連兵は、頭を丸坊主にして刺青を入れた囚人兵です。当時、彼らによる略奪・暴行は日常茶飯事。婦女子は丸坊主にして身を隠し、中学生の私を含め男性は自警団を組織しソ連兵を警戒する、そんな日々が続きました。

ある日のことです。日本人の捕虜が逃げたといって、ソ連兵が私たちの住む長屋へやってきました。彼らは入り口の障子を開けて中へ入ってくると、銃剣で天井や押し入れを突きながら、金目の物をポケットへ入れていきます。私は何を思ったのか、とっさに「チャスイ、ダワイ（時計を返せ）」と言ってしまいました。「おまえを殺す」と逆上するソ連兵に銃殺されずに済んだのは、たまたま巡回に来た朝鮮の保安隊が逃がしてくれたからです。

略奪に来たソ連兵と乱闘になり、隣人が亡くなるという事件もありました。また、ソ連軍の食料庫に入って銃殺された方も……。栄養失調や病気以外でも、大勢の日本人が亡くなりました。記録によれば、3千人の日本人が興南で命を落としているそうです。

コラム 5 ● ソ連の参戦

日本とソ連の間には昭和16（1941）年に締結された「日ソ中立条約」があったが、有効期間5年のこの条約の期限内である昭和20（1945）年8月9日、ソ連軍が対日戦に参戦。満州国や朝鮮半島・南樺太・千島列島などで戦闘を繰り広げ、これによって日本軍は多数の戦死者を出した。生き残った軍人も終戦後は武装解除を余儀なくされ、約65万人（200万人以上という説もある）がソ連軍の捕虜としてシベリアに送られた。これを「シベリア抑留」という。彼らは長年にわたって過酷な労働を強いられ、劣悪な環境下、約6万人が死亡。今も遺骨の収集事業が続いている。



シベリアの収容所での厳しい生活環境によって衰弱死した男性の死亡告知書（提供：平和祈念展示資料館）

荒木 ―― **朝鮮半島からの脱出計画はどのように練ったのですか？**

山田 ―― 日本へ引き揚げるコースは2つ。陸路で38度線を越えて逃げるか、日本海を舟で渡るか。私たちはいわゆる闇舟で南朝鮮（現在の韓国）を目指しました。父が明太（スケトウダラ）漁に使われる舟を押さえてきたんです。終戦翌年の昭和21（1946）年4月20日、家族6人で隠れるように漁村を目指しました。ところが、どこで露呈したのか、保安隊に捕まってしまい、一晩拘束されてしまいます。地元有力者の力添えがあったのか、翌日には解放され、脱出することができました。

高橋 ―― **闇舟で脱出といっても、やはりお金がものを言うのですよね。**

山田 ―― 昭和21年の価格で、一人千円の船賃を支払ったと聞いています。2千円あれば一戸建ての家が建つ時代でした。お金はなかったはずなのに、父はどうやってお金を工面したのか。真相は闇の中です。父は商店街の有力者と仲が良かったので、おそらくそこからの調達だろうと推測していますが。

今考えれば、運が良かったんですね。いい時期に脱出できた。後になればなるほど脱出は困難を極めたそうですし、日本へ帰れなかった人も多かったようですから。

高橋 ―― **闇舟での移動も大変だったのですよね。**

山田 ―― 乗船するのさえ命がけでしたよ。警察から解放された4月21日のことです。桟橋から舟に飛び乗ろうとした瞬間に波が押し寄せ、3歳の弟をねんねこで背負っていた父が、海へ落ちてしまいました。返す波に打ち上げられたところを救出されましたが、九死に一生を得たという感じでしたね。

興南国民学校

興南国民学校の秋の運動会

コラム 6 ● 38度線

朝鮮半島からの日本人引き揚げ者たちの命運を分けたのが北緯38度線。昭和20(1945)年8月9日、朝鮮半島北部へ侵攻したソ連の朝鮮単独占領を防ぐべくアメリカが提示したのが、北緯38度線で半島を分割する案だった。境界線以南は米軍が、以北はソ連軍が占領することになるが、GHQのマッカーサーが人道的見地から早期引き揚げ終了を目指したのに対し、ソ連軍占領エリアはソ連兵による略奪や暴行が横行する無法地帯に。さらにソ連軍は、軍人だけでなく民間人をもシベリア抑留の対象としたため、38度線以北にいた人々の引き揚げは困難を極めた。

昭和26(1951)年7月の38度線の標識
(提供:共同通信社)

闇舟には20人ほどの日本人が乗っていました。漁獲した明太を入れる水槽の中、二畳分ほどのスペースにすし詰めの状態で4日4晩を過ごしました。食べ物はありませんが、水は船頭から与えられていました。船酔いで食欲がなかったのも救いでしたね。もっとも、闇舟代と荷物を持ち逃げされたという話も聞いておりましたので、私たちはつくづく人に恵まれたのだと思います。

南朝鮮の注文津という港にたどり着いてからは米軍の占領下へ入り、上陸舟艇で釜山に運ばれました。明太漁船とは比較にならないほど大きな船です。私はまだ子どもでしたので、船員さんと仲良くなって船室へ入れてもらいました。さらに、釜山で千トン規模の日本の海防艦に乗り継ぎ、一路佐世保へ。一晩の航海でした。5月5日の朝方、誰かの「日本に着いたぞ!」という声に、船酔いで死んでいたような人々の目がぱーっと輝きましたね。タラップに立つと、鮮やかな佐世保の山々の緑が目に飛び込んできました。

荒木 ―― 佐世保に着いたときのお気持ちは?

山田 ―― 一言でいえば安堵です。ソ連兵に二度ほど銃殺されそうになったにもかかわらず、生きて佐世保にたどり着くことができたんだと。あのときの光景は、70年経った今も鮮明によみがえります。

荒木 ―― 当時のことは今もハッキリと覚えていますか?

山田 ―― 覚えていますとも。戦後70年経った今では、多少平和ボケしていますがね。今回、皆さんとお話しするためにいろいろメモを取っていたら、当時の思い出が次から次へとあふれてくるのですよ。70年も前の記憶が鮮明に。

興南時代の友人とは今も交流があります。小学校の同窓会も6校合同でやっていました。しかし、消息不明の人も多いですね。実は最近になって、米を持ってきてくれた朝鮮の友人のことを思い出すんです。あの戦渦で、しかも虐げられた状況で、人間の情というものを与えてくれた人ですね。

山田さんからのメッセージ

戦争はやったらいかんということを伝えていきたいです。では、平和のために何ができるのか。私は以下の三つのことを考えています。一つは教育。若い人たちには、近現代の歴史観をしっかり持ってほしいと思う。それによって自分の考えも固まるでしょうし、日本人としてのアイデンティティーもハッキリしてくるんじゃないでしょうか。そして二つ目。戦争はダメですが、自衛力は持たなければいけないと考えます。これは戦うための戦力ではなく、自分の国を守る手段が必要だということですね。最後の一つは経済力。日本人が平和に暮らすためにも欠かせない要素だと考えます。若い人たちに、そして今後の教育に、私は期待したいと思います。

引き揚げ時の体験

● 山下民子さん（86歳）

本土決戦必至という東京に慶大生の兄を残し、母、姉、15歳の私の3人が蒙疆（中国、内モンゴル自治区中部の地域）の大同で会社経営の父のもとにたどり着いたのは昭和20年6月末であった。北京から汽車で約7時間。大同は古色蒼然たる北魏時代に栄えた町で、雲崗石仏は今や世界遺産である。見学を期待したのにここまで来て治安が悪いとのこと。夜など銃声が日常的に聞こえる。

張家口（河北省北西部の市）の女学校に転校したのは7月29日であった。山のかなたは外蒙の砂漠も遠くないとか、言葉も知らぬ広漠の僻地に今日からは一人だ、と実感。待ちわびた転校なのに姉との別れが突然耐え難くさびしい。丘の中腹の赤い屋根の寄宿舎に泣き泣き登りながら私は固く決意した。今から私は強くなろう、弱いから苦しいのだから強くて優しい人間になろうと。次の朝、同級生のWさんと丘を駆け下り、防疫部隊へ。マラリア蚊の研究班で仕事も少ない。日本からの慰問団の芝居を劇場見物したり、食事係の兵が大量のマヨネーズを作るのを見学したりした。8月13日、突然部隊長が今のうちに冬支度を家から持ち帰れとの命令だ。この夏空に冬支度？　と不審ながら喜んで帰った。

2週間ぶりのたった1泊。15日朝、父が玉音放送を聞いて帰りなさいと言うのを振り切り駅に行ったが、昨日までと違い不穏な空気で、中国人の目つきが違う。発車は異常に遅れ、ただならぬ不安を感じる。同乗の日本人などは平然としているし、冗談を交わす日本兵もいる。不安のまま、寮に着き、初めて敗戦を知った。すぐ電話したが不通。交通も途絶。寮生の半数以上が早くも解散していた。手のひらを返してボーイたちは白眼視している。数日後、校長先生が現れ「戦火により学籍簿その他烏有に帰しこれを以て在学証明書とす」とガリ版刷りの小さな紙片を渡し、わずかな知り合いの縁でも頼って逃げよと。どこも行くアテのない私のほか3人が残った。私はこの証明書さえあれば帰国して母校に戻れる、希望の美大進学も出来ると思い最小限度に持ち物を減らす中、大切に肌身につけた。独身の舎監先生と共に無蓋貨物列車に詰め込まれ天津松島日本高等女学校が避難所となった。ほどなく先生は私たちを天津の日本人家庭に1人ずつ預けてしまった。私は、5歳と3歳の兄妹がいて妊娠中のSさん宅、ご主人は出征中の家に迎えられたのである。北天津駅近い大通りに面し両隣は中華飯店で、店舗型の家だった。近くの銭湯に通えたのもつかの間、引き揚げてしまった。親切なお巡りさんもやがて引き揚げた。そのころご主人が無事帰還され、女の赤ちゃんも元気に産まれた。私はおしめ洗いと幼児のお守り、日光浴兼散歩が役目だが、同胞の消えた街では、さらわれても殺されてもやみからやみでは……、と恐ろしい。いてつく朝夕、トラックに旧日本兵が立ったまま乗せられ銃剣を持った中国兵に小突かれて使役に通うのを目にするのが、日本人との唯一の出会いである。中国美人が白いスケート靴を肩にさっそうと北寧公園に滑りに行く。近いらしい公園に私は一度行ってみたかったのだが、小心の私はつまらなくても安全ルートのみを往復。東京で散々空襲され、中島飛行機で零戦のエンジン製作のため、夜勤、深夜勤務までして働き、今また、外地で敗戦の動乱に巻き込まれた自分の運命を凝視する。病弱な母は果たして健在か？　私はつらさを乗り越えた分だけ両親が天に護られると勝手に決めて自分を鼓舞していた。

5月、いよいよ米軍上陸用舟艇で帰国。神戸でSさんご一家と別れ一路荻窪へ。焼失していたら即、玉川上水入水、と覚悟していたが、家も在り、家族全員無事再会。天津では結局中国人の迫害は一切無く、他方面と比べありがたいことである。私は美術を専攻し、20歳から80歳まで画塾を主宰。現在は明治学院大学の学生さんとアクセサリーなどを作って絶滅にひんするオランウータンを助け、また東北支援の一助にと物作りに励み、それを生き甲斐として感謝の毎日を送らせていただいている。

私の体験

● 匿名希望（77歳）

今、ここに私が生きてこられたのは、終戦後両親が大変な思いをして、二度三度と殺されそうな中、日本に連れて帰って来てくれたからです。両親は満州に渡り、その後私は昭和13年に生まれました。また、弟も生まれ、両親は、遊園地やサーカスなどに連れて行ってくれました。家には、七段飾りのおひなさまがあり、その前で二卵性の双子の姉妹の友だちと写真屋さんに写してもらい、1枚が東京の母の実家に送ってありました。その後返却してもらったのです。私も小学校の1年生でしたが、学校には行かれず、お寺の庭先で防空頭巾をかぶり、おふろの腰かけにかけ、小さな黒板で、スズメの学校のようでした。

戦争も終わり、家が中国人の人々の暴動にあい、箸1本残っていただけでした。恐ろしかった。その後日本人部落の人たちも殺されるところでした。そんな中、1人の方が中国語が話せて、命を助けてもらいました。母は、男装し身を隠していました。

次に怖かったのは、ソ連軍の兵隊が父を連れて行き、何メートル先かで腕時計をとり上げ、父を帰してくれたことです。つらくも逃げ帰って来たところでした。夜になれば、草むらにある大きな土管の中で一夜を明かすのです。次に日本に帰るには、港まで行かなくてはなりません。貨物列車の石炭の中に姿を隠し、何日か過ぎました。港に着き船内に入りました。何百人？　何千人か大勢いました。船の中での食べ物と言えば、赤い飯（コーリャン）で汁物の中はサツマイモのつるだけです。

下船後、天気は曇っていたと思います。

京都の舞鶴に着きました。山並み続く景色が広がっていました。キョロキョロと見渡しました。そして父の故郷の高知県へと鉄道に乗り、親戚の家へとたどり着きました。みんなでホッとしました。

両親には今感謝しかありません。涙が出ます。父が残っていなければ、私は中国残留孤児でしょう。本当にありがとうございます。二度と戦争はしてはいけません。